

## S.C.WORKS 今週のスタディ！

### 【ヘッドライン】

- 1) 「朝カレー」
  - 2) 「限界団地」
  - 3) 「公共自転車でCO2削減へ」
- 

#### 1) 「朝カレー」

これまでは独身者が朝の通勤途中の駅の店などでカレーを食べることがあったが、最近は家庭の朝食として食べるが増えている。

ハウス食品が「めざまるカラダ 朝カレー」と銘打った商品を売り出したことが決定打となつて、朝の食卓にレトルトカレーが出されるようになっている。

また、メジャーリーガー・イチローの特番で彼が毎朝、妻の手製のカレーを食べて球場に出かけていく姿が映され、それも朝カレーを家庭で食べることの後押しとなっているようだ。

日本薬科大学教授の丁宗鐵は、カレーは脳の血流を改善し、集中力を高めるという効果を10年前に臨床実験で確かめて、それ以来、カレーの効用を訴えていた。

作り置きしておけるものの定番でもあるので、手間の割に合うメニューということも影響している。

ナンやパスタ、うどんなど食べ方のバリエーションもあるので朝食に重宝されそうだ。

---

#### 2) 「限界団地」

人口の半数以上が70歳以上の高齢者によって占められていて、集落としての機能を完全に果たすことができなくなっている「限界集落」の団地版。つまり、団地住民の3分の1から半数以上を65歳以上の高齢者で占めている状況をさす。

限界集落の場合は、過疎が進んでいる地方の農村などに顕著に見られるものであるが、団地の場合は都心から1時間も電車に乗れば行けるような都市近郊において見られるようになっている。

1950年代後半における農業中心の政策から重工業中心の政策への大きな転換によって、労働力として農村から都市部へと出てきた人たちに低家賃で提供された団地だが、部屋が狭い物件がほとんどで、子供たちが独立していった高齢者だけが残るケースが増えている。

その結果、居室、商店の空きが目立ち、建物の老朽化も進むようになっている。

配偶者に先立たれた高齢者の一人住まいも目立つようになっている。

50年代、60年代に作られた5階建ての団地の場合、エレベーターの設置義務もなく、最上階の5階で暮らしている高齢者にとっては階段の上り下りだけでも一仕事であり、限界団地対策は大きな問題となっているようだ。

### 3) 「公共自転車でCO2削減へ」

温室効果ガス削減のため東京都心の自転車の利用率を高めようと、環境省は10-12月、丸の内のビジネス街で、いつでもだれでも利用できる公共自転車の社会実験を行う。

駐輪ポートを300メートルごとに5カ所設置して、50台の自転車を配備。徒歩ではちょっと遠い、中距離の移動に、気軽に自転車を使えるようにする。

利用者は、初回登録料1000円を払えば、30分以内の利用は無料で、どのポートに返してもよい。30分以降は10分ごと、3時間以降は5分ごとに各100円ずつ課金。放置や盗難防止のため、1日を超えると、自転車価格相当額がカードから引き落とされる。

実験は、JTB首都圏などと共同で進め、好評なら利用可能な地域を拡大して、事業化につなげる計画だ。

このような公共自転車は、パリで1500カ所に約2万台配置されるなど、欧州の都市で広まり、市民に利用されている。

レンタルサイクルや共用自転車はすでに取り入れられているところもあるが、政府主導で日本全体に普及すれば人々の活動範囲が広がるのではないか。自転車用道路が整備されている地域はまだ少ないが、環境も整えば自転車事故の減少にもつながるだろう。

駐輪場の確保が難しいことや放置自転車など自転車にまつわるニュースを度々耳にし実際目の当たりにもするが、環境保護のためにもこの実験が自転車を利用しやすい街づくりにつながればよいと思う。